

第 109 話<A 級戦犯容疑>の要約と参考資料

第 109 話<A 級戦犯容疑>の要約

土呂久には、中島飛行機の創設者中島知久平氏と岩戸鉦山社長の門吉氏を遠くから見た人、門吉邸の防空壕掘りに呼ばれた鉦夫がいました。土呂久からは雲の上の存在。時代の先を読んで戦闘機生産を始めた知久平氏に、民衆の悲惨な結末は見通せなかったのでしょうか。

第 109 話<A 級戦犯容疑>の参考資料

109-1 中島知久平氏の経歴（渡部一英著「巨人中島知久平」より）

・中島の偉大さは、一口に言い尽くせないが、その 2, 3 点を挙げてみると、先ず気宇が素晴らしく大きかった。気宇が図抜けて大きかったから、何をするにもその構想は雄大であり、腹（度量）も亦素敵に大きかった。だから、小事に拘泥することがなかったし、感情に駆られるということもなかった。又彼には名誉欲とか、出世欲というものがない、物欲さえもあるとは思えないような人であった。それに、極端な売名嫌いでもあった。

（P7）

・中島の人生行路は、軍人志願から始まった。（略）少年時代の彼には大きな夢があった。いや、夢と言うよりは、愛国的悲願と言った方が適切だ。中島はその悲願を遂げる手段として軍人を志願したのであった。中尉か大尉になったら予備役にしてもらって大陸に渡り、馬賊の頭目のその又親玉になって、それからシベリアに入ってロシア征伐をするというのが、その悲願であった。（P8～9）

・彼は明治 44 年（1911 年）に雷撃戦時代の必来を予言している。（略）中島はその頃同僚に対して、飛行機は将来雷撃機として発達し、恐るべき兵器になると語っていたのであった。（P12）

・終戦の年の中島には大破乱があった。東久邇宮内閣の軍需大臣となって羨ましがられたが、それから 3 月後の 11 月には「財閥追放」に処されて経済活動を禁じられ、その翌月は A 級戦犯容疑者に指定されたのであった。巣鴨拘置所へは病気を理由として行かなかったが、自宅監禁の身となり、一切の活動を禁止されたのである。（P16）

・中島は事業企画の才にも長じていたが、蓄財しようという気がなかったのと、航空工業以外の事業に関係する意志がなかったのとで、中島飛行機会社に直接又は間接に関連することは別として、その他の事業にはあまり手を出さなかったから、中島一門で設けた会社は、中島商事、中島航空金属会社、岩戸鉦山会社、千歳鉦山会社の 4 株式会社と富士合名会社だけしかなかった。

中島商事は、中島飛行機会社で使用する材料や物品の購買部として設けたもので、初め

は自分が社長に就任したが、後ち次弟の喜代一にその椅子を譲った。中島航空金属は、航空発動機の原材料を鋳鍛造する会社で、社長は喜代一が兼任した。岩戸鋳山は、錫その他の金属を採鋳する会社で、航空資材に関係があり、社長には2番目の実弟門吉を当てた。富士合名は、同族の持株会社であって、昭和6年に創立し、中島がその社長となったが10年に解散した。

千歳鋳山（社長門吉）は、金鋳の採掘と精錬を行っていた。これだけは中島の本来の事業と関係ない例外的のものに思われたのだが、中島から見ると、航空工業と縁はなくとも、彼の志と全く関係のないものではなかったのである。（略）「今日の日本の対外政策は、米、英、仏などの大国と利害の点で衝突しているので、日本の起債に応ずるような国はないからだ。そこで貿易の赤字決済のために金が大きい必要となるのであって、良い金山を見つけて確保しておくことは、間接に国防に寄与することになる。しかも、これは極めて重要なことなのだ。」というのであった。これは、至極尤もな道理なのだが、太平洋戦争では、全然金を必要としなかった。それは、日本が他国の物資を入手するのに常道に依らず、武力と円紙幣又は軍票を以て周囲の弱い国々から挑発したからであった。（P21～22）

渡部一英「巨人中島知久平」P451

その年（昭和20年）12月2日に至って、日本を占領した連合軍の総司令部からA級戦犯容疑に指定され逮捕令状が出された。敗戦が巻き起こした無情の旋風は、先ず第一級の人物を襲ったのである。中島の晩年はこれから始まり、以後受難が連続した。（略）中島の血圧はいつも異常値を示していたので、已むを得ず「自宅拘禁」扱いを続けさせ、取調べを必要とする時は、ジョセフ・キーナン主席検事が自ら中島邸に出向いて臨床尋問を行ったのである。（略）このような生活が約1年と9箇月も続き、22年の9月1日を迎えた時、中島は戦犯容疑の事実なしと宣告され、監禁生活からやっと解放されたのである。

大人名辞典第4巻（平凡社）

太平洋戦争終了後の12月、マ司令部から逮捕命令が出てA級戦犯の疑をうけたが、22年釈放され、その後はひたすら謹慎して、いっさいの会合に出なかった。24年脳溢血で死去。65歳であった。

109-2 中島門吉氏の経歴

「躍進群馬県誌」（昭和15年3月30日発行）より

中島門吉 中島商事株式会社代表取締役

現住所 東京市牛込区市ヶ谷仲之町10

電話 牛込388番

出身地 新田郡太田町

略歴 明治 26 年 2 月 13 日新田郡太田町なる中島彙吉氏の三男として出生。夙に青雲の志を抱いて上京、実業界に実を投じ大正 11 年中島商事株式会社の創立を見るや、その取締役役に挙げられし、昭和 6 年同社社長に就任、更に中島飛行機株式会社の取締役を兼ね、(1 字不明) に富士合名会社無限責任社員として令名ありたり。

109-3 中島飛行機の成長の経緯

中島飛行機の大拡張と資金 (渡部一英著「巨人中島知久平」P334)

昭和 12 年 3 月、資本金を 2 千万円に増額して工場を拡張した中島飛行機会社は、同年 7 月 1 日に太田工場を太田製作所と、東京工場を東京製作所と夫々改称した。ちょうどその月の 7 日、北支那に盧溝橋事件が勃発した。そのため航空機の需要はますます増強するものと見込まれたので、軍部は中島に対し工場の拡張を要求した。そこで、中島では 7 月末更に太田製作所の敷地、建物坪数並に人員を約 3 倍に殖やすことを決定し、その翌 8 月には東京都下に武蔵野製作所 (発動機工場) を新設することにした。(略)

かくて、日本軍の主力は 12 月 13 日首都南京を攻略し、国民政府は武漢に移り、戦火は益々広がる様相を呈するに至ったので、12 月「大本営」の開設を見、翌年 1 月 11 日には対支新方針を確立するための御前会議が開かれた。(略) これによって、日本の方針は根本的に変化し、日支両国の国交は新たに生まれる支那政権と調整して、更生支那の建設に協力するが、国民政府の抗戦に対しては、同政府が崩壊するまで攻撃を加えて行くことになったのである。

国家の方針がこのように決まると、兵器の花形と言われる航空機の需要は益々どうかするものと思われたので、前年大拡張を決定したばかりの中島飛行機会社では、この年の 2 月、東京製作所の分工場として田無鑄鍛工場を新設することにした。

中島飛行機の表彰とその意義 (渡部一英著「巨人中島知久平」P363)

中島に深い関係のある昭和 14 年中の出来事で特筆を要することがもう一つある。

それは、中島飛行機株式会社が、14 年の 8 月 1 日に陸軍大臣から表彰されたことである。戦時中は表彰濫行が流行し、その価値を著しく落したが、その頃はまだその弊のなかった時であり、殊にその表彰には日本で初めての「兵器表彰」という意味も加わっていたので、同業者からは最も名誉ある表彰として注目されたのであった。(略) 即ち、表彰は「我航空ノ発達ニ寄与スル所大」であった中島飛行機株式会社に対して行われたのであるが、その理由の中で特に性能の優秀な九七式戦闘機の製作に対し、深甚なる感謝の意を表わしていることがそれである。

中島飛行機会社のその後の拡張 (渡部一英著「巨人中島知久平」P377)

海軍機の専門工場として太田製作所から分離した小泉製作所は、15年4月20日に一部竣工を告げ、又海軍御用の発動機工場として武蔵野製作所の西隣に新設中であった多摩製作所は16年10月完成した。

これで中島飛行機会社の製作所名を称する主力工場は、機体工場、発動機工場が3つとなり、ほかに鑄鍛工場を中島航空金属会社として独立させ、直系の子会社としたのであるが、この間に飛行場も1つ殖やした。それは、太田製作所と小泉製作所との間に設けたもので、竣工したのは16年2月15日であった。その大きさは幅1000米、長さ1600米（滑走路は幅70米、長さ1300米）である。これは両製作所で共用したのであるが、名称は「太田飛行場」となっていた。

右のほか、世界一の規模をねらった航空機の総合研究所として「三鷹研究所」を設けることになり、大東亜戦争（のち太平洋戦争と呼称）開始の日、即ち16年12月8日にその起工式を挙げた。

以上で、既定の拡充計画は一応終ることになっていたところ、支那事変が大東亜戦争へと発展したので、航空機の需要は益々激増することが予想されるに至ったため、更に主力製作所を各地に新設することを軍から要求されて決定した。そこで、機体工場として半田製作所（海軍機工場）と宇都宮製作所（陸軍機工場）を、発動機工場としては大宮製作所と浜松製作所を、又機関砲銃架工場として三島製作所を設けることになり、17年半ば頃から夫々起工式が挙げられた。

中島飛行機会社の盛時（渡部一英著「巨人中島知久平」P27～29）

中島飛行機製作所を「中島飛行機株式会社」にしたのは、昭和6年の12月で、そのときの公称資本金は1200万円であった。当時の主力工場は、太田と東京にあるだけだったが、昭和19年には所長を置く主力工場は太田製作所、東京製作所、武蔵製作所、小泉製作所、半田製作所、大宮製作所、宇都宮製作所、浜松製作所、三島製作所の9製作所に増加し、外に三鷹研究所を持ち、又、田無鍛工場を独立させて中島航空金属株式会社とし、これを直営工場にしてあった。

右の各製作所は夫々分工場を各地に設けてあったので、これ等を合わせると70工場の多きに達していたのであるが、翌年地下工場や疎開工場が建設され、近郊分散の小工場（約100カ所に在った）を除いた中以上の工場だけの集計は実に102に上り、その敷地面積は1076万9000坪、建物床面積約70万4000坪、機械台数3万735台、従業員数は約25万人（当時世界的大工場と言われたゼネラルモーターズ・シーメンス会社の従業員数は約20万人）で、とてつもない大メーカーに発展していたのであった。これに約2億9100万円を投・融資して培養してきた協力工場が68社もあり、下請工場の数に至っては無数という有様であったのである。（略）

では、中島飛行機がどれだけの仕事をしたかということ、工場創設以来終戦までに製作した飛行機の種類は民間機21種、陸軍機40種、海軍機65種合計126種、その製作総数

は2万6868基で、そのうち有名なのは、陸軍機では隼、鐘馗、呑竜、疾風、海軍機では月光、零戦、天山、彩雲、銀河、連山、民間機では中島式AT、中島式DC-2型、ダグラス式DC-3型等である。また、発動機は、試作を入れると20種以上を製作し、その数約5万基に達した。(略)

次に、生産状況をみると、昭和19年下期における月産平均は、機体は682機、発動機は1016基となっており、昭和17年以來の全日本の生産に対する比率は左の通りである。

	17年	18年	19年	20年(3月迄)
機体	24%	28%	28%	34%
発動機	27%	33%	30%	31%

次に、売上金額から見た生産成績を、昭和10年のそれと19年のと対比してみると、機体では65倍、発動機では40倍の飛躍を示している。(単位千円)

	機体	発動機	計
昭和10年	11,951	14,821	26,772
昭和19年	780,653	616,949	1,397,602

なお、終戦後第一軍需工廠が解散した時の総人員は26万1358名となっている。以上によって、中島飛行機がいかに大きなものであったかということが判ると思う。即ち、日本にはあらゆる業種を通じてこれ以上大きな工場がなかったのである。中島飛行機会社が日本一の大会社に発展したのは、満州事変、日支事変、大東亜戦(太平洋戦)と打ち続く戦争ブームに因ることは言うまでもない。

109-4 中島飛行機生産の機体数、発動機台数

中島飛行機の機体と発動機生産数(高橋泰隆著「中島飛行機の研究」P30)

	機体(機)	発動機(台)
1935(昭和10)	146	480
1936(昭和11)	335	540
1937(昭和12)	363	780
1938(昭和13)	987	1548
1939(昭和14)	1177	2538
1940(昭和15)	1081	3144
1941(昭和16)	1085	3926
1942(昭和17)	2788	4889
1943(昭和18)	5685	9558
1944(昭和19)	7943	13926
1945(昭和20)	2275	3981

109-5 財閥解体と中島飛行機

森川英正著「日本財閥史」P222～224

連合軍は、昭和20年8月15日の日本敗北後、日本の非軍事化と民主化を目的とする占領政策を実施した。占領政策の重要項目の一つが財閥解体であった。つまり、占領者側は、財閥を日本の軍国主義と封建主義の経済支柱と見なしていたのである。(略)

まず、21年9月、三井本社、三菱本社、住友本社、安田保善社、富士産業の5社を持株会社に指定したのを皮切りに、83社の持株会社指定を行い、持株を持株会社整理委員会に提出させた。中でも、財閥本社は、必要手続き完了後、解散させられた。なお、富士産業は旧中島飛行機である。財閥と規定するには問題があるが、中島知久平一族の封鎖的出資によっていること、多数の系列企業を抱えていること、戦争遂行に協力したこと等によって、財閥解体措置の対象とされたのであろう。

次いで、22年3月、三井、三菱、岩崎、安田、中島、浅野、大倉、古河、野村、鮎川の10財閥の主人公であった56家族が、財閥家族に指定され、資産凍結と持株の持株会社整理委員会に対する提出を命じられた。財閥家族の成員は、一切の財閥系企業の役職を辞しなければならなくなった。23年には財閥同族支配力排除法が公布された。

109-6 中島家と土呂久

中島知久平

佐藤シズ子さんの話 (1979年4月20日聴取)

知久平さんが大臣しとるときに、わざわざ選鋳場(東岸寺)まで来らしたことがある。お供を連れて、ほんのちょっとおらした。

中島門吉

米田嵩さんの話 (1979年8月19日聴取)

(門吉氏は)土呂久に来たことがある。麦わら帽子をかぶり、青い竹の長いのを杖がわりにして歩いて登ってきた。あとで、「あれが中島の親父じゃ」と聞いた。2回くらいは見やせんじゃったかの。バリっとした恰好はしてこんかった。

佐藤光さんの話 (1979年11月6日聴取)

昭和14年11月から19年春まで、東京板橋にあった陸軍兵器行政本部で軍需工場の兵器の指導、検査の仕事をしていた。17年ごろ、丸岡袈裟治さんと春目の佐藤丹蔵さんの息子(功)の2人が、芝の中島邸の防空壕掘りにきた。丸岡さんは、坑内で履くゴムの短靴をはいておった。みんな革靴をはいて回るころ。

佐藤ツルさんの話（1979年2月聴取）

私の父は丹蔵。弟に功がいた。大正14年生だろう。功は戦争中、坑外の仕事で土呂久鉦山へ行った。そのころ短期間、防空壕掘りに行った、